

理事 寺川 彰

我々が行動する場合の判断基準は、経験と理念による他、情報のインパクトによる場合が多い。往々にして、不確かな情報や、予測の情報に頼って、判断を誤ることもある。我々をめぐる環境についての社会的判断は、これらの個人の集大成である以上、最新の正しい情報に基づいた納得のいく合意が必要である。

世界的に著名なエイムス博士の研究では、最大耐量（化学物質によつて生じる毒性が現れ、かつ、死亡率の増加が無投与群の10%以内の薬量）を実験動物に投与する慢性毒性試験で、調べた天然化学物質77種、工業用合成化学物質350種のいずれも、約半数が発がん性を示す結果となり、これは、不自然な高薬量投与に起因するものと解析している。

化学物質が毒性をもつということ、それが人体に危険であるということは区別して考えるべきである。化学物質は、自然のものであれ、人工のものであれ、生体にとっては、摂取量により、毒にも薬にも変化する両面を備えているので、その危険性は定量的に判断されるべきである。

亜鉛や銅のような重金属物質は、生体にとって有害であるとはいえ、その微量は必須成分であり、一方、安全と思われている塩や砂糖、また、ホルモンやビタミンも過量に摂取すれば有害である。バランスよく適量を摂取することにより、始めて生体の機能は健全に保たれる。すなわち、毒性を示すに至らない量の多種類の成分の組み合わせにより、栄養が保持され、危険性が回避されているのである。

医薬品は、病状に応じて、定量的に供与されるが、効果と同時に副作用の害を伴うことが多い。すなわち、副作用という毒性を避けられない量の摂取によって生体の危険性を排除している。我々は承知の上で、治癒という利点を副作用という危険性に優先させ、また、手術に伴う危険性も已むを得ぬ代償として受入れているのである。

現在、モルヒネは麻薬としてきびしく規制されているが、末期がんの疼痛治療に用いて患者の痛みを解消し、延命のための行き過ぎた濃厚治療より、生存の質を高めるホスピスケアとして、ようやく日本でも普及され始めようとしている。これは毒物としてきびしく規制されている物質の特性を上手に生かし、微妙に調製して、副作用を伴うことなく余命を誇り高く生かすことができる画期的な医療と言える。

ともすれば、我々は、物の善悪を一方的にきめて黒白をつけ、行き過ぎた批判、規制を行いがちであるが、物は物として無限の多様性を秘めてそこにある。我々は、正確な知識と冷静な判断によって、その功罪を見極め、利便性と危険性を天秤にかけて知恵ある選択を行うべきである。

我々の行動や活動、また、人間に役立つような物質の生産や使用にも、必ずある程度の危険性が伴うが、我々は常に、その必要性とのバランスで、プラス・マイナスを判断している。

電気やガスは危険であるが、その危険性はほとんど感じられない程に制御され、生活のすみずみにまで活用されている。

しかし、今や個人にも社会にも欠かすことができない程に魅力的な生活必需品となった自動車は、その利便性と引き替えに、おびただしい数の交通事故という危険な代償を支払う事態を招くことになった。さらに、排気ガスによる大気汚染、光化学スモッグ、酸性雨の被害に加えて、激しい騒音や渋滞など、多くの社会問題を引き起こしている。

人畜無害のフロンガスも、オゾン層を破壊する程の大量使用のために、世界的に禁止の方向にある。

我々がひたすらに求めてきた、安全、健康、快適、便利な生活手段が、その大量普及により地球規模の環境に思いがけない様々な影響を及ぼし始め、時には、人間環境の保全と自然保護の間に相反する複雑な関係を生じている。

我々は今、商品の、大量生産、大量消費、大量廃棄という生活様式について、利便性と、そのために引き起こされる有害性や危険性とのバランスをどこに求めるかを、問い直されている。

物質によって得られる快適さを進歩、発展と考え、努力を傾けてきた科学技術文明全体のあり方と、その基礎にある価値観について、我々は改めて考え直してみる必要があるのではなかろうか。

今世紀、科学技術は、驚くべき繁栄を人間社会にもたらし、技術万能、物質万能の考え方が支配的になったが、物の豊かさとはうらはらに、心の豊かさとは何かを見失った感がある。

我々が真に豊かになるためには、物の本質と価値を知り、それを生かし、共に生きること、また、足るを知る心となり、とめどないそして惰性的に流れている物への欲望に自粛のメスをいれ、それを社会的合意にまで高めること、すなわち、物に心の加わったバランスのとれた社会を構築することにより、活性化された人間環境を創造することができると思われる。